

Mon Nara



Numéro270 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会 JUILLET-AOUT 2015 7-8 月合併号

今秋「ガイドクラブ復活」のお知らせ

奈良は、『万葉集』あるいはもっとそれ以前の時代から現在に至るまで、大和や日本の内外から、様々な旅人を迎えて来た土地です。日本とフランスの文化交流活動に携わっている私たち奈良日仏協会では、かつて会員有志が「ガイドクラブ」を作り、奈良を訪れるフランス人にフランス語でガイドをするという活動をしていました。ここ数年中断されていましたが、この秋、会員のフランス人の友人を浄瑠璃寺に案内することになり、久しぶりに再開します。浄瑠璃寺は実際には「大和」ではなく「山城」に位置していますが、近鉄奈良駅からバスで25分くらいの所にあり、奈良観光と合わせて訪れることの多いお寺です。

◇9月19日(土) 勉強会開催 (14:30~16:30)

奈良在住のピエール・レニエさんを講師にお迎えして、浄瑠璃寺のことをフランス語ではどのように紹介すればいいのか、一般的なことを習います。さらに、かつてこの寺に訪れた二人の旅人の文章を紹介し、彼らがここで何をどのように感じたのか考えてみます。ひとつは哲学者・和辻哲郎(1889-1960)の『古寺巡礼』(大正8年初版、昭和21年改版、浄瑠璃寺を訪れた時のことを記した部分とその仏訳)、もう一つは作家・堀辰雄(1904-1953)の『浄瑠璃寺の春』(昭和18年『大和寺・信濃路』所収、日本語のみ)です。以下に和辻の一節を紹介します。



「この心持ちは一体何であろうか。浅い山ではあるが、とにかく山の上に、下界と切り離されたようになって、一つの長閑な村がある。そこに自然と抱き合って、優しい小さな塔とお堂とがある。心を潤すような愛らしさが、すべての物の上に一面に漂っている。それは近代人の心にはあまりに淡きに過ぎ平凡に過ぎる光景ではあるが、しかしわれわれの心が和らぎと休息とを求めている時には、秘めやかな魅力をもってわれわれの心の底のある者を動かすのである。」

Quel sentiment était-ce donc? Certes, c'était une montagne peu profonde, mais tout de même, sur cette montagne, il y avait un village calme, comme s'il était détaché de ce bas monde. Et là, il y a cette élégante petite pagode et le pavillon du temple enlacés avec la nature. Au-dessus de tout cela, plane un charme adorable qui pourrait enrichir le cœur. C'est un paysage trop léger et trop banal pour le cœur de l'homme moderne, mais lorsque notre cœur a besoin d'harmonie et de repos, son charme discret fait vibrer quelque chose au fond de notre cœur.

外国人であれ日本人であれ、誰かにある場所のことを紹介する時、かつて訪れた人のことを知ると、自分自身の経験も深められるような気がします。10月10日の散策には参加できずとも勉強会のみの参加も歓迎です。

○参加費：会員 500 円 一般 800 円 (当日配布資料代含む) ○場所：生駒市芸術会館美楽来・セミナー室 1
○申込先：Nasai206@gmail.com (9月1日以降) tel&fax 0743-74-0371

◇10月10日(土) 浄瑠璃寺散策 (12:45 集合~16:15 解散、その後、参加者有志で飲み会)



浄瑠璃寺は、平安時代に末法思想が流行った時に多数建立された九体阿弥陀堂が唯一残る貴重な寺院です。境内は、東には東方浄土の薬師如来を安置する三重塔(国宝)、西には西方浄土の阿弥陀如来を安置する本堂(国宝)が、中心には池があり、この形が「浄土式庭園」を形作り、仏教の中の極楽浄土の世界を表しているとされています。当日は、講師のピエール・レニエさんと客人のフランス人とともに、近鉄奈良駅で待ち合わせて、路線バスで浄瑠璃寺に向います。この日のみの参加可能。

○参加費：会員 1500 円 一般 2000 円 (定員 12 名、要予約、バス代・拝観料込み)
○申込先：Nasai206@gmail.com (9月1日以降) tel&fax 0743-74-0371

HP 閉鎖とリニューアル準備のお知らせ

奈良日仏協会の HP は昨年末以来不安定な状態が続いていましたが、本年 6 月 3 日、不正アクセスがあり、プログラムが書き換えられているため、HP を閉鎖するとの通知がサーバー会社よりありました。その後、対策を協議して、7 月 2 日に第 5 回理事会(臨時)を開催し、特別予算を組んで、現在の HP を閉鎖したまま、新たに HP を作り直すことを決定しました。現在、会員で、HP 管理担当者の久保田さんが、少しずつ新 HP 構築作業を進めています。トップページを始めとして下層頁まで含むレイアウトを決定し、すべての情報(コンテンツ)を一からアップしていく膨大な作業が必要であり、まだ時間を要します。会員におかれましては、いましばらくお待ちくださるようお願い申し上げます。

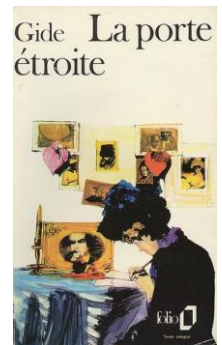
(2015 年 8 月 1 日 会長)

フランス文学の庭から <40>

三 野 博 司 (会長)

名句の花束

— étroite à n'y pouvoir marcher deux de front
 二人並んでは通れないくらい狭いのです
 (ジッド『狭き門』1909年)



前回までに「美女と野獣 騎士と妖精」の主題で三つの作品を紹介しましたが、その前に取り上げたのはバルザック『谷間の百合』でした。モルソフ夫人ことアンリエットが、フェリックスとの地上での愛を断念し、天上を憧憬しつつ死を迎える物語でした。今回取り上げるジッド『狭き門』のヒロインもまた、やや似た経緯をたどって、現世での愛を遠ざけて病死してしまいます。モルソフ夫人は貞淑な人妻にして二児の母。フェリックスとの愛をかなえるには困難な状況にあります。他方でこちらのヒロインであるアリサはもっと自由な身であり、すべては彼女の意志で決定できるように思われます。ところが、プロテスタントの厳正な信仰が彼女の愛の障害となるのです。

アリサはもちろん西洋人の名前ですが、若いころ私が初めて『狭き門』を読んだときには周囲にそのような名前の女性はいませんでした。ところが、20年ほど前に授業でこの作品を取り上げたとき、ひとりの女子学生が「私も有里紗」ですと言って、これが日本人の名前になっているのに気づきました。そしていまではもう珍しい名前ではありません。亜理沙、愛梨沙、ありさ……。

作者のジッドは1869年パリに生まれました。リュクサンブール公園のすぐ北、現在のエドモン・ロスタン広場2番地、ダロワイヨのあるところです。彼は好んで自分を「2つの血筋、2つの地方、2つの宗教の果実」と呼んでいました。父は南仏出身でカトリック、母は北仏出身でプロテスタント。この二つの要素が自分のなかで混交していると自覚していましたが、ただ宗教的にはとりわけ厳格なプロテスタントの母に育てられ、11歳の時父を失ってからはいっそうその支配を強く受けました。

フランスはカトリックの国であり、プロテスタント教徒は、カトリック教徒、イスラム教徒に次ぐ第3位で、人口のわずか3パーセントを占めるにすぎません。歴史的には15世紀末、アンリ4世がナントの勅令を発して信教の自由を認めたことで勢力を得ましたが、ほぼ一世紀後にルイ14世がこれをフォンテーヌブローの勅令で取り消したことも手伝って、フランスでは少数派になってしまいました。



「宗教改革」を意味する *Réforme* という名を冠したプロテスタント系週刊新聞があります。第二次大戦後に発刊され、現在も続いています。私の博士論文の指導教授であったヴィアラネー先生は、大学を早期退職後、1984年から数年間 *Réforme* の編集長を務めておられました。事務所は、パリ、モンパルナスのメヌ通り43番地にあり、何度か編集長室を訪れました。

博士論文を書きあげたあと、先生からの求めに応じて、数年にわたりこの新聞に日本文化紹介エッセイを書いたことがあります。プロテスタント系の新聞ということで、日本人の *spiritualité* に触れるような文章を心がけました。生まれてから30年京都に住んでいたもので、春の桜、秋の菊、おけら参り、金閣寺などなど、主として京都の風物を紹介しながら日本文化と日本人の精神生活に触れました。やはりプロテスタントであり、*Réforme* の読者であったモンペリエ大学教授のジャック・プルースト氏から感想を認めた手紙をもらったのもなつかしいです。

のちにこれらの文章をまとめて中級フランス語の教科書を作りました。タイトルは *Les Saisons nipponnes et leurs signes* です。自分自身が授業で何度か用いたほかに、他大学でも教科書として採用してくれる人があり、さらにはこの中の文章を仏文科の大学院の入試問題に使わせて欲しいという依頼もありました。東京の知られた私立大学でしたが、「大学院の入試レベルとして最適なんです」とのことでした。

また話がわき道に逸れましたが、ジッドについては次回に。

福井日仏協会「地方における日仏交流」に参加

副会長 野島正興

7月11日（土）、福井日仏協会は創立5周年を記念するシンポジウム「地方における日仏交流」を開催した。奈良日仏協会はいわば福井の先輩格として、他の3つの日仏協会（金沢、岐阜、新潟）とともにシンポジウムのパネリストとして招待を受けて参加。それぞれが独自の日仏交流の実績と展望を語った。午後2時、会場の福井県国際交流会館特別会議室には60人ほどの会員・市民が参集。講演と質疑応答が行われた。私はあらかじめ申し出のあった福井日仏協会の希望に従い、11年前の「アルザス・奈良仏像写真展」について、企画から実施に至る道筋と反響について報告した。その概要は次の通りである。



4人のパネリスト



講演を聞く人々（コルマル会場）

2004年11月中旬、当時創立10周年の奈良日仏協会はアルザス日本学研究所との共催で、フランスのコルマルとストラスブールで「アルザス・奈良仏像写真展」を開催。奈良日仏協会からは5人（代表・野島）が4泊5日で現地を訪問。同行をお願いした写真家、小川光三氏の講演「日本の仏像と古代信仰」（通訳付）は、ご自身が撮影した奈良の仏像写真がぐるり聴衆を取り囲む中で行われた。講演の後、小川氏には次々と質問が寄せられ、日本文化への理解を深め、関心を高めることになった。コルマル会場では2週間の開会中、参加者総数700人という盛況ぶりであった。

さて、3時間ほどのシンポジウムに続いて、夕方6時から、福井日仏協会5周年記念パーティーが開かれ、芹川貞夫会長、大城閑副会長ら大勢の会員と歓談。若いフランス人も5人いて、明るく賑やかな交歓風景。午後8時30分、ご招待に感謝申し上げ、特急サンダーバードで帰途についた。

Lettre de Pierre Silvestri depuis Paris (ピエール・シルヴェストリのパリ便り)

パリには住民がいなくなる。夏たけなわになると«la Grande Boucle»（「ラ・グランド・ブックル」はツール・ド・フランスの別名）もまた最高潮を迎える。私の子供時代・青年時代・そして大人になってからも、いつもこの年間行事によって日常のリズムを与えられ、多くの人々の生活の目印になっている。およそ3000キロの距離を持つ伝説的な諸段階から成るこのレースは1903年に誕生し、自転車競技のもっとも重要な行事となっている。



2015年7月19日（日）現在、ツール・ド・フランスは3週目（最終週）に入ろうとしている。スタートを切った200人近くの選手たちは、転落・体調不良・各段階ごとのゴール到着時間への遅れのために、もはや175人しか残っていない。今月26日、この途方もない大祭典は、シャンゼリゼ大通りで繰り広げられる最終スプリントで終わりとなる。

自転車競技の世界を揺るがすドーピングに関するスキャンダルは止まないが、それでも「ツール」は人々を魅了する。路上のファンたちに無料で提供されるこの見世物の衰えない人気の理由はいくつかある。強いサスペンスのくり返し、苦痛に直面するチャンピオンの勇気、通過していく様々な風景の美しさ等。「ツール・ド・フランス」のおかげで、現地で観戦する人もテレビの前にいる人も、フランスの諸地方を再発見する。地方はこのスポーツのドラマ作りの見事な舞台背景となっている。

ツール・ド・フランスは、映画と同じように、空間・時間に関して特別な性格を有している。どの選手も、いちばん早くゴールラインに帰ってくるというたったひとつの目的しかない。フランス全土のあらゆる場所が、挑戦する自転車選手にとっては障害となる。私は小さなテレビ画面の前で、一方の眼で土地の風景の美しさを、もう一方の眼で選手の対決を、じっと見つめている。



奈良の食材と奈良のシェフの新たな取り組み

皆様こんにちは。ビストロルノールは今年の7月1日で三周年を迎えました。奈良日仏協会様のお力添えもあり今日に至ります。初心忘るべからず、今後も日々精進をし、フランス料理文化の啓蒙に努めたいと思います。

さて、今回はビストロルノールの新たな取り組みであり、今春より参加している【NPO 法人テロワール】の活動について少しご紹介させていただきます。同法人はフレンチやイタリアン等、奈良県内のオーナーシェフで構成する非営利活動法人です。奈良県の南部・東部地域には素晴らしい農産物や畜産物が多くあります。その食材を使って工夫を凝らした料理を開発・提供する事で、生産者と消費者に関心を持っていただき、その橋渡し役になればという思いで、料理人らしい、料理人だからできる活動を行っています。



その活動もまだ始まったばかりで試行錯誤の日々ではありますが、7月現在の活動としましては、曽爾高原のサランバレタスの生産者とのコラボレーション企画（7月限定）で毎週月曜日に奈良県庁内のセブンイレブン前の回廊スペースにて、奈良の食材をふんだんに使ったお弁当【なら弁】50食限定¥1080を販売しています。7月9日にはNHKラジオの公開生放送にも出演させていただいたり、7月30日には曽爾村に出向き生産者との交流会をしたりと活動の場をひろげています。また、厨房設備を積んだキッチンカー【YAMATOのキッチン】でのお料理

も楽しんでいただけます。



「なら弁」

もっと詳しく【NPO法人テロワール】を知りたい方は facebook ページでも活動を紹介していますのでご覧ください。「いいね！」もお願い致します。奈良の食材をフランス料理で表現するのは容易ではありませんが、テロワールのシェフ達の魔法の手にかかれば、感動の料理は間違いなしですよ！暑い夏こそ、しっかりとバランスの良い食事を心がけて元気に過ごしましょうね！それでは皆様、奈良を丸ごと Bon appetit！（法人会員 北田浩久）

ビストロ ルノールからのお知らせ



①

① 8月24日（月）奈良、元興寺（11：00～14：00）にて、夢まつりに出店いたします。個性派料理人の屋台を楽しみながら、奈良市吹奏楽団の演奏、琉球祭太鼓を堪能できます。

② 9/28（月）第13回チーズ検定が、ビストロ ルノールにて開催されます。お申し込みは9/7（月）まで。詳しくは www.cheesekentei.com を御参照ください。またはビストロ ルノールまでお問い合わせください。（tel. 0743-75-9555）



②

Recette du «Poulet sauté à la sauce de soja»

今回は、ビストロルノールの北田由佳さん（法人会員）が「鶏の照り焼き」の作り方を紹介してくださいました。レストランのマダム・チーズプロフェッショナル・そして二児の母として、多忙な毎日をすごしておられるなか、とっても簡単で、どんぶりにしても、お弁当のおかずにしても（冷めても）美味しい一品とのこと。ありがたいメニューです。（編集部）

【材料】（4人分）鶏もも肉2枚、砂糖大さじ1、酒大さじ2、みりん大さじ2、しょうゆ大さじ2

【Ingrédients】（pour quatre personnes）2 cuisses de poulet désossées, une cuillère à soupe de sucre, deux cuillères à soupe de saké, deux cuillères à soupe de mirin (alcool de riz doux et épais), deux cuillères à soupe de sauce soja

- 1) 鶏肉を皮目から焼く。Faire revenir le poulet côté peau en premier, puis l'autre côté.
- 2) 油が出てくるのでキッチンペーパーでふく。Avec du papier absorbant, bien essuyer l'huile qui sort de la viande.
- 3) 調味料を合わせまわしかける。Bien mélanger le sucre, le saké, le mirin et la sauce soja, et verser le mélange sur le poulet.
- 4) たれが絡まり、照りよくなってきたら出来上がり。Servir lorsque la sauce est liée et que le poulet a un aspect bien verni.

第 38 回奈良日仏協会シネクラブ例会 (6/28) 報告

トリュフォー特集第 4 回 (最終回) では、監督自ら主演する『緑色の部屋』(1978) をとりあげ、参加者の皆さんの鋭いコメントや意見交換を通じて、この映画のテーマや演出について理解を深めることができました。

■端的に言って面白かった。こだわりは誰もが持つ。それが極端に表れる人とそうでない人がいる。これは映画なので前者にあたる。主人公は愛する人を忘れないことに異様なまでの情熱を傾ける。トリュフォーは何かの情熱にとらわれた人間を好んで描く。情熱のために生命まで賭けることができる生き方は、ある意味で幸福なのか？

■主人公は私たちが生きている世界とは、まったく異なる世界に生きている人だと思った。「死者の礼拝堂」のシーンは幻想的ですごくきれいだった。あれほどの蠟燭を燃やしたら火事になってしまうのではとつい心配さえしてしまったが、映像の美しさは忘れがたい。カラー作品でありながら白黒の雰囲気を出そうと、トリュフォー自身、映像にはかなりこだわりを持ち、カメラマンのネストール・アルメンドロスもそれに答える仕事をした。

■ポール・マシニーとはどういう人物なのか？ 主人公にとっては仇敵、やがて彼が愛するようになる女性にとっては愛人。マシニー本人は、映画には写真と名前でしか登場しない。にもかかわらず、彼の存在は主役の男女の内面心理を支配し、彼の死が二人の男女の間にドラマを生みだしている。トリュフォー的な作劇法。

■ラストの場面で、主人公はマシニーを許すことを女に告げて彼女の愛に答えようとするが、その場で息絶える。過去の憎しみを忘れて、現在生きている人への愛を選んだと解釈できる。その一方で、女がその場で息絶えた男のために蠟燭を一本捧げる時、何かしらのイロニーや喜劇性も感じられる。物語に曖昧な部分をもたせつつ、見事な映像と音楽を組み合わせ、映画として素晴らしい作品を創るところがトリュフォーらしい。

■主人公は死んだ人をいつまでも愛し、憎んでいた相手を死んでからも憎む。ところが仲介する愛人があらわれて彼の内面に矛盾が起こり、結局は破滅してしまうので、一種の人間喜劇ともいえる。

■監督は自ら演じた主人公の考え方に全面的に共感しているわけではなく、共感する面があって、それを映画の中で問題提起しているところがある。人間として、大切な人の事を忘れたくないという気持も真実だが、生きていくうちに忘却が訪れるのも真実。その点は、プルーストの「記憶」と「忘却」のテーマとも重なり合う。

■これまであまりフランス映画はみたことがなかったが、さほど違和感を感じることなく見た。男女の関係において、愛した妻をいつまでも忘れないというのは、すぐに相手が変わってしまうフランスの一般的傾向とは真逆で、むしろ日本的なメンタリティーに近いものを感じた。死者に対する考え方においては、悪人であっても死んでしまえば「仏」となって憎しみを忘れる日本的な精神文化との違いを感じた。

■日本では、仏壇にお水をあげたり、お彼岸にお墓参りをして死者を敬う習慣や文化があるが、この映画のような極端な形ではない。観光でフランスの墓地に行くことはあまりないので、この映画のお墓の場面が面白かった。

■ヘンリー・ジェームスの原作にはない「豊饒の少年」を登場させたり、死者とそっくりな「蠟人形」や「戦争」の映像などを使用しているところに、トリュフォーの個人的なこだわりが感じられる。「死」をノスタルジーとしてとらえるのではなく、「死」について考えさせる作品だと思った。

■主人公の愛人を演じた女優のナタリー・バイが、きれいで感じよくて印象的だった。死者を敬う女性の役だが、むしろ「生」を感じさせるような演出がなされているのではないかな。



第 39 回 奈良日仏協会シネクラブ例会 (10/25) 案内

★日時：10 月 25 日 (日) 13:30～17:00 ★会場：奈良市西部公民館 5 階第 4 講座室 (予定)

★プログラム：アラン・レネ監督『六つの心』(C  urs, 2006 年, 126 分) ★参加費：会員無料、一般 300 円

★問合わせ：tel. 0743-74-0371 Nasai206@gmail.com ★飲み会：例会終了後「味楽座」にて (例会・飲み会とも予約不要)

★2015 年秋からアラン・レネ特集をお送りします。当シネクラブでは 2009 年 12 月から 2010 年 6 月にかけて、レネの作品



を 3 本 (『メロ』『恋するシャンソン』『アメリカの伯父さん』) 紹介しており、今回は 2 度目のレネ特集となります。レネは昨年 2014 年 3 月 1 日に 91 歳で亡くなりましたが、最後まで新しい作品を作り続け、映画監督としての生涯をまっとうしました。『六つの心』は 83 歳の時の作品で、サビーヌ・アゼマ、アンドレ・デュソリエといったレネとともに年を重ねて円熟味を増す常連俳優たちが、落ちつきのある味わい深い演技をみせてくれます。原作はレネお気に入りのイギリスの劇作家アラン・エイクボーンの「Private Fears in Public Places」。舞台をロンドンからパリに移しかえて、都会に生きる男女 6 人の日常の生活と内なる孤独をさりげなく浮き彫りにした、とても粋な作品です。

第 126 回 フランス・アラカルト (7/25) 参加報告

♪ クラシック・ギターの演奏会は何 10 年ぶりでしょうか？ 今回の心地良い調べは心を癒してくれました。目を閉じていると映画のワンカットシーンのように、美しいヨーロッパの丘陵が浮かんで、そこを男女のカップルがゆっくり歩いている姿がイメージとして湧いてきました。普通の 6 弦ではなく 11 弦ギターを目の当たりで聴くのも珍しかった。私には初めて聴く曲もありましたが、アンコールは名曲中の名曲、誰もが知っている「アルハンブラの思い出」と「愛のロマンス」。前者は、旅行した時のアルハンブラ宮殿を想起させ、後者は、高校生時代以降何度も見たフランス映画「Les Jeux Interdits」（禁じられた遊び）を、そしてナルシソ・イエペスを思い出させました。彼は確か 10 弦ギターを弾いていたように思う。若い頃クラシック・ギターを少し練習したこと、今は押し入れの奥に埃をかぶったギターがまだ残っていることなど色々記憶がよみがえる。次の機会があれば、ソルの「魔笛による主題」、アルベニスの「セビリア」を聴きたいです。喫茶パルは初めてですが、落ち着いたパリのシャンソニエの雰囲気があり、日ごろの喧騒から離れた空間に自分が入り込み、癒を言えば赤ワインがあればもっと良いと勝手なことを考えてます。今回は、遠く三重日仏協会から来てくださった大原里歩さんは私の高校（三重県立津高校）の後輩という偶然の出会い、旅行好きのパルの店主とお話が出来たことなど、実りの多い集いでした。（坂本成彦）



♪ 当日の昼下がりの暑さを忘れさせるほどの濃密な演奏に感激！ ドビュッシーの「月の光」はピアノ演奏の CD でしか聴いたことがなく、生のギター演奏は初めてで、金谷氏が「この曲は難しい…」とおっしゃった言葉が印象に残りました。後半のパルバラの「パリとゲッティンゲン」やピアフの「群衆」など、ちょっぴりうっかりハミングしてしまいました。（藤原智子）

♪ 明るいカフェでケーキとコーヒーをいただきながらおしゃべりな暑気払いの午後。フランステイストでの選曲、第一部はエリック・サティなど、それらを六弦ではなく広い音域や表情をだす十一弦ギターを弾きこなして、圧巻でした。第二部の六弦で弾いたピアフのシャンソン「群衆」ほかラヴェルの名曲。アンコールの「禁じられた遊び」などは初心者には嬉しいプレゼント。金谷さんはギターの魅力を「癒しの音」だといいます。合間のトークでは、留学中の苦労話をさらっとユーモラスに。その日は大阪方面「暗峠」から大和へ入り、途中ガタガタした敷石道路でエンジン加熱におちいったという体験を披露。暗峠は古来より馬で通った古街道で「鞍借り」が語源との説も。ギターをのせた車で無事にたどり着いた金谷さんに拍手！（泉悦子）

♪ 「エスカルゴなギター」って何のことかずっと気にかかっていました。いろいろ考えてみましたが、カタツムリとギターがどうつながるのか見当もつきませんでした。そこで金谷さんのホームページを覗いてみるとそこには次のように書かれていました。《アジサイの葉の裏に人知れずいるカタツムリのように表の世界から一歩身を引きマイペースで自分の信ずることを追及する。それを願って名づけました》。エスカルゴというユーモラスなイメージと音を持つ言葉には、金谷さんの真摯な生き方、ギター音楽への情熱がこめられているのですね。10 歳からギターを始められたということですが、今もアジサイの葉の裏のカタツムリをじっとのぞきこんでいる少年の面影を見たような気がしました。金谷さんのギターのあのやさしく、あたたかく、そしてどこか悲しく、清んだ響きはそこから出ているように感じました。控えめなお人柄も心にのこりました。（吉野道世）

♪ 店内には会員の方の他、パルさんのなじみのお客さんも多くこられ、夏のひとときをクラシックギターによるフランス音楽、そしてパル自家製ケーキで楽しんでいただきました。軽いおしゃべりを交えながら 11 弦ギターによるフランス近代音楽、または普通の 6 弦に持ち替えて往年のシャンソンの名曲を演奏。静けさを全面に出したドビュッシーらクラシック作品と、Charles Trenet らの軽妙なシャンソンとの対比がフランス文化の面白さ多様さを十二分に引き出した、そんな演奏会になりました。最後は「禁じられた遊び」などギター名曲でアンコールを飾り、ギターの一の美しさもお届けすることができました。（金谷幸三）



♪ 会場の喫茶パルは、日頃から会報の発送作業で使わせていただき、奈良日仏協会として大変お世話になっています。当日はマダムが手作りのバナナケーキと粗品を用意され、カメラマンの御主人はその場で撮影した写真を皆さんにプレゼント、嬉しいサプライズの連続でした。金谷さんのギターはさすがの腕前で、徐々に深みを増していく音色に、ただただ聴きっていました。（浅井直子）

会員紹介

奈良とフランス語

藤井 文代（ふじい ふみよ）

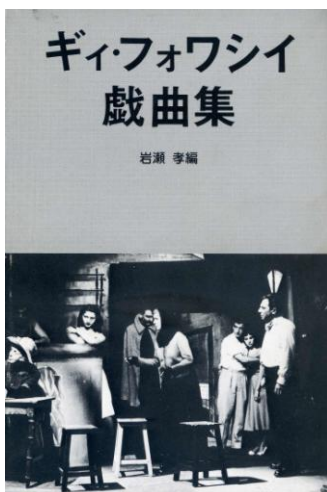
奈良は、私にとって、「フランス語と出会った街」です。

1988年に、奈良市立中央公民館で開講されたフランス語講座で、数年間、学ばせていただいた事が、何にも増して、フランス語に親しみ、フランス語を取り囲むさまざまな事に目を向け、同時にその事に心ときめく自分を作ってくれたと、今もそのように思っています。

“やりなおしのフランス語”というそのときの講座名が、私を強く引きつけました。「やりなおしと言えるほど、かつて勉強したのか…？」との自問が沸きあがったのも確かですが、それよりも、どうしても、フランス語を初めからきちんと学びたい、という気持ちの方が勝っていたのだと思います。

その授業は、たいへん丁寧で、カセットテープからの「dictée」（フランス語の書きとり）は、私にとって、手強い宿題でしたが、心の底に、何か弾むものがありました。そんな中で、少しでも手ごたえをつかみたくて、ラジオフランス語講座の半年分を、フランス語の箇所だけつなぎ合わせて、一本のカセットテープに仕上げ、毎日、暇さえあれば聞いたりしました。（柏岡珠子先生と、リアンヌ・ベルノットさんが講師の分です。）

また当時、大阪の国際交流センターのホールへ、ジャンヌ・モローのひとり芝居を観に出かけたりもしました。地味な感じの舞台でしたが、低い声で静かに主人公が登場した最初の場面は、よく覚えています。フランス語を聞きとる力はまだまだ弱い私でしたが、芝居の台詞は、想像以上に聞きとれるものだなあと感じました。俳優さんは、客席に台詞がきちんととどく様に訓練を重ねて舞台に立つわけなので、映画よりも言葉の勉強の為には良い、との感想を持ちました。ただ、映画よりも遥かに接する機会が少ないのも確かなことです。



それから 10 年近くが経った時、再びフランス語の演劇を観る機会が訪れました。

2001 年の 5 月、ならまちセンターで、奈良日仏協会と、奈良小劇場設立準備委員会との主催によるもので、フランスの劇作家ギイ・フォワシイ作品が上演されたのです。

「ナント劇団スファンクス」による上演で、作品は「相寄る魂」と「動機」の二作でした。さらにその 5 年後の 2006 年 7 月には、八尾プリズム小ホールにて、「ギイ・フォワシイ・シアター」（東京の劇団）創立 30 周年記念公演として、二作品を観ました。そのうちのひとつは、フランスの「カンヌ 73 劇団」による「橋の上の男」（演出 シャンタル・ブイッソン）で、日本語字幕付きでした。日本での、この作家の作品の上演は、すべて同シアターを率いるプロデューサーの谷正雄氏が手がけていましたが、その谷氏は昨年 7 月に逝去されたとの由、総合演劇雑誌で知りました。

このところ、フランス語とのかかわりを、自分なりに、あれこれと考えています。また秋以降に、一步を踏み出せばいいな、との思いでおります。

「食べながら学ぶチーズ講座」開講のお知らせ

9 月からチーズ（fromage）の専門講座が始まります。毎回テーマを決めて、実際にチーズを食べながら学びます。お昼の時間帯ですので、自家製ライ麦パンもたっぷり用意します。チーズ検定やチーズプロフェッショナルの資格に関心のある方、美味しいチーズを味わいたい方・好奇心旺盛な方など、みなさまのご参加をお待ちしています。

★日時：毎月第 2 水曜日の 11：00～13：00

★講師：北田由佳（チーズプロフェッショナル）

★受講料：会員 2800 円、一般 3000 円

★会場：「ビストロルノール」（生駒市松美台 33-2 tel. 0743-75-9555）

※近鉄生駒駅から、生駒台循環バスで、新生駒台北口バス停下車

★申込＆問い合わせ：ビストロルノール tel. 0743-75-9555

第 1 回 9 月 9 日：「フランス人に愛されるコンテチーズ」（AOC のチーズの中でももっとも生産量・消費量ともにナンバーワンのコンテの魅力を探ります。

コンテチーズ熟成違いの食べ比べと、同郷のワイン（最高品質のヴァン・ジョーヌ、シャトーシャロン）、紅茶、コーヒー、ほうじ茶とのマリアージュを検証しましょう。）

第 2 回 10 月 14 日：「イタリアチーズの王様・パルミジャーノレッジャーノ」

第 3 回 11 月 11 日：「11/11 はチーズの日」（第 4 回以後も継続予定）



第 127 回 フランス・アラカルト「Cuisine Familiale avec Monsieur Yonezu」のご案内

- ❖日時：9月7日（月）14:00 受付 14:15 開始 16:30 終了予定 ❖会費：会員 1300 円、一般 1800 円 ❖定員：20 名（先着順）
 ❖会場：「菜宴」（奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F TEL: 0742-26-0835 近鉄奈良駅近く）
 ❖問い合わせと申込先： macquico@gmail.com tel & fax : 0743-75-8136 又は tel. 080-1440-2841
 ❖ゲスト：米津春日さん（1930 年生まれ。1990 年よりリーガロイヤルホテル総料理長、1998 年よりリーガロイヤルホテル料理特別顧問。フランス製菓連合会より金賞受賞。フランス・ランス市商工会議所より功労賞受賞。労働大臣表彰「現代の名工」受賞。全日本司厨士協会より卓越最高技術顧問金賞受賞。フランス料理アカデミー協会会員、エスコフィエ協会日本支部、ラ・シェーヌ・デ・ロディスール協会、他著名団体の理事を務める。1998 年「黄綬褒章」受章、2007 年フランス共和国より「農事功労賞シュヴァリエ」授章）
 ❖米津さんからのメッセージ：食文化を支えているのは家庭の味です。親から子へ伝えられる料理の味がその国の食文化を支えていると言ったら言い過ぎでしょうか。今回はフランス料理というものが日本にどのように伝わり、どのように根付いていったのかをひもときながら、家庭で簡単に作れるフランス料理をみなさんにご紹介します。



Nos amis francophones à Nara (2) ダヴィッド・スミスさん

近鉄奈良駅前の T ビル 3 階にある「スミス外国語アカデミー」で、英語とフランス語を教えているダヴィッドさんにお話を伺いました。

（ダヴィッドさん）2009 年に外国語教室を開校して 6 年になる。生徒さんたちが、どんどんレベルアップしていくのを目の当たりにするのが嬉しい。自分は 19 歳の時、レスリング練習中の事故で全身麻痺となり、入院一週間後には父が病気で亡くなった。葬儀にも出られず、7 ヶ月寝たきり生活を余儀なくされた。その間に日本語をマスターすることを自分に誓った。以来、独学で日本語の勉強に専心した。仏語・英語に続く第 3 番目の言語として日本語を選んだ理由の一つは、子供の頃「キャプテン翼」「愛してナイト」「グレンタイザー」など日本のアニメが大好きだったこと。2004 年の終わり頃に来日し、東京に少し、静岡に 1 年いて、その後奈良に来た。奈良は自分の故郷のデジョンと同じではないが、何か通じるものを感じた。駅のすぐ隣に広々とした奈良公園があるのが気に入った。レストランや映画館（今はもうないが）もあって便利ながら落ち着きのある生活ができる、それでいて国際的、そんなところがよかった。とにかく外国語の勉強が好き。やると決めたら徹底的にやる。漢字検定の準 1 級はただ一人満点で合格、1 年後には 1 級にも合格した。目標に向かって努力することが好き。そういう人の手伝いをするのも好き。

（感想）とても純粋で、日本語と奈良を愛することにかけては、誰にも引けをとらないと断言するほどの情熱家ダヴィッドさん。日本語を覚えるためにびっしり書きこまれたルーズリーフの分厚いファイルを見せてもらいました。くり返し参照したので、どこに何が書かれているか頭に入っているそうです。見習いたいと思いました。（編集部）

会員通信

★8月18日（水）午前10時半、奈良県立美術館「百花繚乱中国リアリズムの煌めき」展開式・内覧会に Mon Nara 本号同封の葉書持参者招待。8月23日午後2時からの南城守氏美術講演会に、日仏協会会員 10 名招待。

連絡先：090-8751-6408（藤村）

★8月29日（土）18時半、FANA 大阪にて「ギター定例演奏会」、9月22日（火・祝）14時半いかるがホールにて「ギターDUO PAGODA コンサート」。

連絡先：090-5967-1924（金谷）

★9月19日（土）18時半、NHK 大阪ホールにて「ジャン・ソニエ・ジルバール・ペコー・35 周年記念コンサート」。

連絡先：06-6922-6502（梨里香〔中辻〕）

★9月22日（火・祝）13時半秋篠音楽堂にて「ファイン・アーツ・コンサート 2015」上田賀代子（ピアノ）他、日仏協会会員 10 名招待。連絡先：090-2193-3295（上田）



編集後記 ☆6月下旬から8月が見頃という蓮の花、今年は例年より早く咲き始めたそうです。奈良の蓮の名所といえば喜光寺・唐招提寺・薬師寺。境内にはたくさんの蓮鉢が並び見事な花を咲かせています。☆葛城市當麻寺の當麻曼荼羅には蓮の花に坐す釈迦の姿が表わされています。☆万葉集の蓮を詠んだ 4 つの歌では、いずれも花ではなく葉が詠まれ、大きな緑の葉の上に透明な水がはじける様子を想像すると、爽やかな感じがします。☆仏教のイメージをもつこの花をフランス語でいうには、形容詞をつけて「lotus sacré」とした方がわかりやすいかもしれません。☆モネの絵で知られる「睡蓮」(nymphéa, 植物名 nénuphar) は、プルーストの小説では「ゲルマントのほう」を象徴するヴィヴオンヌ川の水上庭園として描写されています。☆暑い夏は強い陽射しをさせて涼しい木陰や室内で心おきなく読書にふけるのもいいですね。(N. Asai)

◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。

◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、ホットなフランス情報などを歓迎します。誌面の都合で意味を極力変えずに表現を変えさせていただくことがあります。締切日：次号は**9月30日**が原稿締切日です。

Mon Nara juillet – août 2015 **7-8 月**合併号 numéro270

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : afjn_info@kcn.jp FAX 0742-62-1741

〒630-8691 奈良中央郵便局 郵便私書箱第 30 号〔郵便物のみ〕 ©発行責任者：三野博司